

ティティの保護ではなく、その主体的な確立を求めるエスノナショナリズムとして対応することのコストを比較、再検討する必要はないだろうか。

無論そこには、エスノナショナリズムがやがてはナショナリズムに昇華し、国家の形成を求めるかもしれないという懸念がつきまとう。だが、現代の東トルキスタン・ムスリムの知識人層(ziyali)が常に「国家」を念頭に「民族主義」的主張をしているだろうか。例えば、トルグン・アルマス(Turghun Almas)の『ウイグル人(Uyghurlar)』問題における政府の対応³⁸は、これを分離主義的ナショナリズムとして捉えていることを示すものであった。しかしながら、ジェディディズムがネーション形成の過程で現れた新奇で世俗的な事象を自分たちの文化的文脈に基づき主体的に解釈しようという運動であったように、ナショナリズムには文化的アイデンティティが反映され得る。むしろこのような文化的アイデンティティが政治化されたものとしてのエスノナショナリズムをその視界に捉えることによってこそ、ナショナリズムの多様なありようが理解され得るのではないか³⁹。これまで極めて政治的な分離主義的ナショナリズムと捉えていたものは、実は政治的と文化的との区別を超えたムスリム知識人層のアイデンティティの現れであったかもしれず、そこに「族群」化されることを拒む東トルキスタン・ムスリムの「民族」的感情を見出すことができるだろう。

[補記] 本稿で使用されるジェディディズムという片仮名表記は、現代ウイグル語の発音に近い表記の採用を意図したためであったが、国内の先行研究(その他中央アジア地域も含む)に倣い、「ジャディーディズム」とした方が適切であったかもしれぬ。しかし、シンポジウムでの報告に基づくという本稿の性格上、当日配布資料上の表記をそのまま使用した。中国語では几底(ji di)或いは札吉德(zha ji de)と表記されている⁴⁰。

また本稿は、愛知大学国際中国学研究中心2005年度若手研究者研究助成を受けた研究成果の一部である。



●座長(馬場) — ありがとうございます。発表は論理的には非常に明解なので、それではこれから各先生方の批評をしていただきたいと思いますが、その前にちょっと簡単にいまの発表をおさらいさせていただきます。

最初に従来の「一民族一国家」論です。これが最近では破棄されて、中華民族に対して族群論、Chinese nation に対して ethnic minorities というかたちの最近の提起が論究されまして、特にこれが中華民族と族群の二重アイデンティティということで解釈が可能だけれども、あくまでこれは文化的スタイルのみに限定されているとされています。

それから各少数民族、すなわち族群の異議申し立てを認めていないところがあるということから、族群と適用されることを拒否するといった説明があったと思います。

³⁸ 新疆社会科学院のウイグル人研究者トルグン・アルマス(Turghun Almas)の著作『ウイグル人』、『匈奴簡史(Honlarning qisqiche tarihi)』、『ウイグル古代文学(Qadimki uyghur adabiyiti)』を対象とした思想・言論統制キャンペーン。中央アジアを古来よりのウイグル人の祖国と見なす表現が問題視されたという。90年8月16日付の『新疆日報』で地方民族主義分子と攻撃される。

³⁹ van den Berghe, P. L. "Ethnic Pluralism in Industrial Societies: A Special Case?" *Ethnicity*, Vol.3, 1976, を参照。

⁴⁰ 前掲『中国新疆地区伊斯蘭教史 第二冊』181ページ および 李琪「“東突”分裂主義勢力の思想体系和基本特徴」(周偉洲主編『西北民族論叢』第三輯、中国社会科学出版社、2004年)101ページから。

そのうえで中華民族論が出てくる背景として、王朝の正統性の崩壊があります。中国というか中華世界と言いましょか、これは「中華+夷」という、直轄地と理藩院統治なのだろうと思いますけれども、具体的な領域を考えたわけです。それが崩壊したあと、エスニックな共同体がそれぞれ、いわゆる孫文の「五族共和」論ということで現出してきます。それを再統合するなかで、中華民族論と中華民族が出てきたということです。

それと関連して、いままで非常に議論になっています費孝通の「中華民族多元一体論」については、多元性というところに中華民族の持続的存在を可能にしたシンボルという意味合いで凝集力を持ったのだとおっしゃいました。正直言って私は、その部分がちょっとわかりづらかったのですけれども、そういうご説明がありました。

中華世界といえますか、そこにおける王朝正統性の崩壊、さらに各エスニック共同体の分解といえますか、現出といえますか。さらにその再統合という、ともにパラレルなかたちで、このジェディディズムが考えられるだろうということです。そこではウンマが解体したあと、エスニックなイスラームが出てきて、多元性が出てきます。再びムハンマドのウンマへの回帰というかたちで言われたり、あるいはウェテンという言葉で説明されたり、これは領域を含めることになると思いますけれども、そういうことで中華世界の中華民族論とパラレルなかたちでの位置付けがされたと思います。

具体的な展開として、言語と教育の改革ということで、言語では共通トルコ語、教育では世俗化ということが述べられたと思います。

そのなかで、各共同体が乗り越えていくなかで科学と宗教の一体化、あるいはムハンマドの定義を持っていくということをやっています。途中、トルコ語教育をやるということですが、パン・トルコ主義ではないという説明があったと思います。そして最終的に、「おわりに」のところにありますように、ネーション形成の過程で現れた新奇で世俗的な事象を、自分たちの文化的文脈に解釈しようという運動であるとおっしゃいました。そのナショナリズムには文化的なアイデンティティが反映されることから、現在の中国における「東突」への対応の見直しまで、ある程度射程に入れた提起だったのではないかと思います。ちょっと不十分なまとめかもしれませんが。

そのうえで、これからコメンテーターの先生にコメントをお願いしたいと思います。最初に梅村先生、お願いいたします。

●梅村— そろそろ二日目で疲れてきました。最後のセッションで非常に理論的な、詰めた議論が展開されたものですから。私も事前に拝見していたのですが、パワーポイントもなかなかすっきりと私の中で消化していかないところがあるかと思います。

私は民族学でも人類学でもありませんので、本来このテーマでしたら、次の王柯さんが中華民族についても最近書かれましたし、『東トルキスタン共和国研究——中国のイスラムと民族問題』という立派な本も書かれていて、コメンテーターとしてはこのお二人だけでいいと思いますし、いまだにそう思っていますが、どうしてもお話ししなければいけないと思います。

いま小嶋さんのご報告にあったように、理論的に中国という領域のなかで、かつて19世紀末ぐらいからロシア領域に起こり、清末から伝わってきたジェディディズムといえますか、ジャディード運動と言っているものは重要だと思います。

まず一つの質問ですが、ジェディディズムという概念を持ったものが、中国領領域内でもいいですし、中央アジアでもいいですが、いつごろまで継続・継承されていたのだろうかということ

おうかがいしたいと思っています。

といいますのは、いま申しましたように19世紀終わりから、最終的にはその発展過程として、たぶん東トルキスタン運動、独立運動、あるいは実際に短期間ながら独立を果たした東トルキスタン・イスラム共和国——いま言う新疆ウイグル自治区を中心とした（全部ではありませんが）——が1930年代、1940年代にありました。そこに至る過程の問題として、ずっとこのジェディッドイズムをお考えになっているのかどうかということをおうかがいしたいのです。

つまり、一方の中国の領域のなかで現在言われていて、ここでも問題にしています中華民族という概念が生まれてくる、すなわち東から出てくるものと、西のほうで生まれていたものにはタイムラグがあると思いますので、二つを理論的にお考えになったのはよくわかるのですが、そのタイムラグをどのような問題として考えたらいいかというのが、質問の主旨です。

私のコメントは、あまり理論的な頭を持っていないものですから、中国の特に新疆におけるウイグル族を中心として、マイノリティーを具体的に実際に見るという立場から若干のコメントをしたいと思います。問題そのものは極めて政治的な側面が強いという言い方になるかもしれません。

そこで政治的なことから言いますと、中華民族主義あるいは中華民族とは、私なりに言えばもちろん実体ではなくて、エスニックグループからすれば幻想としての国家のイメージと直結しているものであると思います。というのは、マルチな多民族国家であるというのは厳然として憲法にうたってあるわけですし、そういったものは否定されないわけですが、それをカバーしてまとめていく中華民族は、やはり一つの国家としての言説のものだろうと私も思います。

それでは実際に各民族、エスニックグループ、あるいは先ほど紹介がありました別の新しい概念というものを含めて、各個のマイノリティーのグループの存在を、どのように位置付けるかという問題だと思います。例えば先ほどのお話で言えば、つくり出しつつある民族であるダフルのようなものです。これは当然それぞれの主張、主体性に基づく国家の構成要素として無視できないというのが、おそらく中華民族主義を言いつつ、国家としての公式見解になるかだと思います。

ところが、もしエスニックグループのほうに重点を置いて注目すると、彼らのアイデンティティを重視するにとどまらず、それが保障されなければいけないという言説につながっていくだろうと思います。まかり間違っても、文化的にせよ、政治的にせよ、宗教的にせよ、弾圧対象ではあり得ないということを言わなければいけない状況があるのかないのかというところで、どのように結論されるかと思っていましたら、今日は文化的アイデンティティであるというところに収束されたのだろうと思います。それはそれで一つの優れたまとめだと思います。

中華民族ということを言うにせよ何にせよ、問われなければならないのは、昨日も少し議論が出たと思いますが、「中華とは何か」「華とは何か」「漢とは何か」ということです。これの根本問題につながっているのだろうと思います。これはほとんど今日の話、いまの小嶋さんの提起からすれば、「イスラームとは何か」とほとんど同義でありまして、正面から議論するといってもなかなか答えが出ないので、一つ材料をいただいたのだろうと思います。

私なりの中華というものは、「天下」という宇宙観で、礼教による理論的なものです。そういうものについて、実は清の時代のいろいろな事象、つまり満州族の宮廷でありながら、モンゴル、最終的には中央アジア部分、チベット、中国本土全部を支配していくのが王朝であって、天下観を継承しながら少数民族であるという、先ほども出ました民国時代の五族共和とか、ああいう問題に直結していくのだということです。

ですから、その清朝の分析はまだまだ足りないはずでして、これは歴史学のほうで進められて

いると思いますが、それは今日は別にします。例えば中華という擬製的な、ある意味でフィクションのような概念が中央アジアに、あるいはここで言うトルキスタンにどのように及んでいたかということを見るには、ジョセフ・フレッチャーが明から清に向けてたいへん面白い論文を書いていて、特に明とティムール帝国との関係を文書から分析しています。中華皇帝側は内に向かっては当然天下観を主張していましたが、実際の他者との具体的な貿易には、利益を優先するために、そのかたちを崩しているのだという議論をしております。

そして、いわゆる現在の中央アジア地域の、もうティムール帝国がなくなったあとの分析も少ししているのですが、トルキスタン、東トルキスタンの分析についても、そのオアシスの土着勢力がときどき一つにまとまったりするわけです。これは小規模であるものの、ずっと独自の行動を取り得たのだという観点を出しています。これなどをヒントにしながらか、中華という概念が必ずしも絶対的なものではない、絶対的なものとして他者を縛るものでも必ずしもないということに、われわれは注意すべきかなと少し思いました。

ところで、現実的に現在の問題として、例えばウイグル族などのマイノリティーを見ますと、中国は現在、たぶん国家統合の途中にあるのではないかと私は感じています。それを優先させることは、その統合の過程でそれに直面していく、つまり先ほどのお話のように、イ族がいて、チベット族がいて、漢族が下のほうに垂直レベル（地理上の高低）でいて広がってきている、その漢族とは何だろうということ、ほんとうは分析しなければいけないと思うのですが、われわれは見やすいかたちで、上のほうにはいわゆる古層としてのマイノリティーがずっといるということになると思います。

トルキスタンなどの場合だと、いろいろな見方ができるかもしれませんが、先住していたという人々。それが先ほどのトルグン・アルマスのように、2千年来ずっとウイグルだと言い続けるかどうかは民族性の創出の問題で、別の問題だと思いますが、少なくともいろいろな人も混じりながら居続けている先住の人たちが住める場所というのは限られているわけで、今度は水平の砂漠かオアシスかといったら、砂漠に住めるわけではないので、どちらかといえば集住する場所は農地とオアシスということになります。

しかし、そこに住んでいる人たちにとって、現在の中国の国家統合というものは心理的なレベルで、そして現実的な生活のレベルで、違ったかたちでのベクトルがあります。心理的なベクトルは中華というもの、華というものへのかなりの違和感ではないかと思います。もう一つ、現実的なベクトルはその反対を向いていて、現在の統合過程で生み出されてくる市場主義経済による富裕化、就職の機会等で等質化していくということです。

ただし、その場合も、現実を見るとベクトルのなかにも、いろいろなものがあると私は見ておりますが、大きく言うとその二つではないかと思えます。つまり、そこで言う統合過程で広がってくる中華、華というのは、昨日言いましたが漢字であり、漢語であり、もろもろのルール、市場経済、観光経済、自分たちが観光化されるという経済、そういうものとして目の前に迫ってきています。それで一つひとつがクリアされていくと、現場の先住の人たちにとっては、一つひとつが場合によっては喪失感につながるのではないか。そうなった場合に、その人たちをどのように見るのだろうかという問題があります。

先ほどフレッチャーについて言いましたが、中央アジアの勢力はティムールのほうに飲み込まれる時代もありました。そのあとは自立もしました。あるいはロシアに飲み込まれそうにもなりまし、中華に飲み込まれそうにもなりまし、いろいろな局面が起こるわけですけども、自分

たちは生き抜いたと自己主張して、生き抜いたという気概が残る場合があります。

その場合のイスラームを、今日小嶋さんはかなり理論的なウンマということでお話になったわけですが、もう少し普通の習俗としてのイスラーム、習慣としてのイスラーム、生活としてのイスラームを見ますと、実はそれがワタン(ウェテン)、祖国とか郷土とかいろいろと言うと思うのですが、もともとはチュルク系の言葉だった「イル」という、土地とか私のところとか、日本語ではひらがなで書く「くに」ですね。あるいは郷土、郷里につながっていくのだらうと思います。

それとは別にウンマというのは、運動体としてのイスラーム、あるいは民族の定義として運動体としての民族があるとすれば、そういうものに近いものだらうと私は思います。

要するに、住民が自立したアイデンティティを持ちうるか否かというところが、今日の提起のなかに含まれていて、私はなるべく現場に近づいて、そのように考えてみたいと思いました。長々とどうも失礼しました。

●**座長**— 王柯先生にお願いしたいと思いますが、実は時間が押しております。梅村先生が10分以上お話になって、ほかの先生に時間を保証しないというのはたいへん恐縮ですけれども、一応5時10分と申しあげていますし、できましたらフロアからもご意見をいただきたいと思っていますので、10分をめでにしてよろしくお願ひします。お二人には申しわけありません。

●**王**— 王柯です。梅村先生のコメントを聴いて、私もたいへん勉強になりました。

今回の発表を聴いて、ちょっとプレッシャーを感じました。なぜかといえば、私は日本に来てもう18年たちます。18年のあいだに学術書を2冊書きました。1冊は『東トルキスタン共和国研究』という本で、もう一冊は『20世紀中国の国家建設と「民族」』という本でした。民族主義という視点、そして漢族の民族主義、漢族の少数民族の地域に影響を与えたという視点に立てて書いた本です。私は20年間近い歳月を何のために使ったかという、その2冊の本だけでしたが、小嶋先生はほんとうにあつという間に、私の20年間の仕事を全部争奪してしまいました。ほんとうに感動するとか、それによってたくさんの刺激を受けました。

話を元に戻します。小嶋さんの論文を読んで、そしていまの発表を聴いて、私は全体的に言えばその論点に、あるいは分析にとっても賛成します。私は小嶋さんの発表はこのシンポジウムの主題と一番近いのではないかとさえ感じています。もちろん、ほかの先生の発表も立派ですが、こちらは両方のことを取り上げて話しているということでもあります。そして小嶋さんの発表を聴いて、私は一層民族、あるいは民族国家という理論が、中国の分析に対する有効性を疑うことになりました。

これは私の持論ですが、私はずっと、民族国家という理論をもって中国を分析することは適当ではないと考えています。ほかの先生たちも、中国は国民国家といえるかどうか、あるいは近代国家といえるかどうかとおっしゃっています。なら、この理論はなぜ中国に導入されたのでしょうか。それは「政治体制の近代化」。正直に言うと、中国は間違いなく民族国家を目標としてやってきました。

学術的にはたくさんの学説がありますが、小嶋さんの発表のなかにも同じような話がありました。費孝通先生やたくさんの先生の努力で、全部無理やり一つの民族であるというように頑張っています。そこまで頑張る必要があるかどうか。むしろ小嶋さんが言ったように、頑張れば頑張るほど成立しないと思います。つまり、自民族の民族主義が正しい、あるいは民族観が正しいといえば、い

ろいろな民族的集団も同じような理論を持って、自分も民族と見なされたい、自分も民族として独立する、すべきであるというように、中国あるいはいまの政府、あるいは中華国家に対して、自分の独自性を主張することができます。

中華民族という概念は、中国の国民を統一させる万能薬ではないということをぜひ理解していただきたい。むしろ小嶋さんが指摘したように、中央政府として無理やり労力を使っても、結局たぐさんのほかの民族、あるいはほかの人々に、あるいは中国のいまの国家の体制に対して疑問を持っている人々に道具を与え、あるいは一種の理論を与えたことになるのではないかと思います。

そして実際の研究においても、私は以前からこれを主張しています。中国の理論は本当に間違っています。わたしは、中国と「中華民族」の人々が、近代以前の中国の国家スタイルを思い出して、もう一度国家の行く先を考えなければいけないと、ずっと主張しています。

そのなかで、やはりさかのぼって言わないといけないのは、先ほど梅村先生がおっしゃった言葉です。中華の「華」と漢民族の「漢」はどこから来たか、あるいはどんな意味を持っているか。それを考えないといけません。一番考えるべきことは、むしろ民族国家という理念はどこから来たか、なぜ中国に紹介されたかということです。それを考えもせずに、いきなり中国は悪い悪いと言って問題の本質に触れることが出来ません。これは下手なやり方です。では、なぜ下手なやり方を選んだのか。この点を小嶋さんにも、先生がたにもぜひ考えていただきたいことです。

このことについて、私は別の本にも書きました。日本の影響が非常に強いということ、ぜひ理解していただければと思います。昨日私が会場に入ってきたとき、「日本民族」という話がされたところで終わりました。そうではなく、日本民族は東アジア全体にとって、特にいま沖縄にいる先生方もいますので、どういう意味で、無理やりというか「日本民族」をつくったのかを考えてほしいです。

小嶋論文の理論、あるいは論点に私は賛成します。しかしわざわざ遠くから来て、それなりに自分の意見を申しあげないと申しわけないと思います。

小嶋さんの論文の構想と手法について、私はちょっと疑問を感じているところがあります、問題意識は非常に素晴らしいのですが。一つは、このような比較の手法がほんとうに適当かどうか。つまり、両方を無理やり持ってきて比較していませんか。その相似性、共通性があるということだけに小嶋さんの論文は労力を使われてしまいましたが、先ほど言ったように、民族国家自体は中国国家にとって正しくないという発想が、もともと小嶋さんの頭のなかに絶対あるはずで、私もここまで読み取れました。だから、この部分について二つの論文として考えるべきではないかと考えます。

もう一つは、このことに関連して、その共通性を証明する手法に、さらに問題を感じていることです。なぜかという、ここでいろいろな共通性があるという理論を持ってきましたが、この理論は結局全部欧米の民族国家、あるいは民族の形成に関する既存の理論であります。例えばネイションは過去の継承性から非常に大事であるとか、スミスの学説などです。

私から言わせてもらいますと、もともと民族国家という発想が中国あるいは東アジアの社会、地域には相応しくないのであれば、このような分析の理論はもともと成立しないのではないのでしょうか。少なくとも小嶋さんの主張の正当性を証明するためには使えないのではないかと私は感じています。

ほかの問題も感じていますが、時間の関係でもう一点だけ申します。先ほどのこととも関係します。つまり、中国の学界では本当に中華民族の多元一体構造という学説が定着していると考えてい

ますか。これは小嶋さんの論文を読んで、あるいはいまの発表を聴いて気になりました。実はそうではない、と考えなければいけません。むしろ、たくさんの先生は無理やりもう一回説明しようと、さまざまな努力をしているところでもあります。中華民族という言説は、それをいかにあいまいに解釈するかということより、むしろ民族国家の理論そのものが中国にとって適当ではないのではないかということについてさえ、非常に疑問視しています。私たちもその点を、自分の論文やその議論を発する以前に、これを知ったほうが良いかと思えます。

これは自分の経験であります。昔、私の書いた論文を中国で発表することは、なかなか難しいことでした。しかし最近たくさんの中国の友だちに読んでもらって、ぜひ日本語から中国語に訳してと言われました。なぜかという、何年か前から私はずっと批判の目で、中国の共産党、あるいは孫文先生が歩んできた近代化の道を分析しましたが、中国政府にとってこれは一種のタブーでした。しかし、最近そうではないということも、ぜひ理解していただきたいと思えます。もっと素直なところから中国の正しくないことを指摘しても大丈夫かと思えます。

●座長— 田島先生、よろしくお願いします。

●田島— とは言いながら、中国という国はあるわけですね。中華民族というものも定義されているわけで、私はわりと中国の民族政策は、日本よりましなのではないかと思っているところもあって、だからこれを批判するのはけっこう難しいのかなと思っています。

私はど素人なので、今日は質問とかコメントというよりは、小嶋さんに一つお願いしておきたいのですけれども、お話をうかがっていて小嶋さんは結局、問題意識のあり方は毛里先生と非常に似ているのかな、と思いました。毛里先生は国家形成エトニと非国家形成エトニというものがあって、その双方に対して同じ対応をしても、あまり意味がないのではないかとおっしゃっていたように思うのです。

ただ、私が引っかかっているのは、国家形成エトニというのは、今日客体・主体という話がありましたけれども、これは客観的にそうなのか、それとも主観的にそうなのかという問題があると思うのです。もし制度的に何か特別な対応をしなければならないというのであれば、やはり客観的にある程度それが言えるということでないかと思えます。

ちょっと枠組みの話も出てきましたけれども、一つゲルナーの話をしておきますと、ゲルナーというのは要するに高文化と低文化の二層構造を考えているのです。産業社会化が契機になって、それが国民国家になっていくのだという言い方を彼はするわけですが、それはヨーロッパの文脈だから言える。つまり絶対王政があって、産業革命があってという過程があるから言えるので、たぶん清朝という帝国からいきなり国民国家をめざした中国には二層構造ではなくて、最低三層が必要だと私は思っているのです。

実は、私はもともと方法論のグループなので、加々美先生にはそんな話をするなど怒られるかもしれませんが、方法論のシンポジウムでこの話をするつもりでした。第一層が文明の層、官になった士大夫もそうです。言ってみればここが宗教共同体の支配層で、礼教があり、書面漢語がある。第二層は文化で、地方権力者とか宗教指導者はここに入っています。また、官になり損ねたような読書人層も入っています。第三層は民の層で、ここが言ってみれば非識字層で、秦先生が最初におっしゃっていた農民の世界です。

この第三層では華夷秩序がすごくあいまいなのです。どこからどこまでが華で、どこまでが夷か、

よくわからない世界です。だから、第二層を持っていたグループに関しては、五族というかたちでわりと最初から認識されているわけですがけれども、五十六ということになると、第三層まで下っていったら、民族識別工作をやらないと出てこないという話になってきます。たぶん、この三層がないと中国は説明がつかないのだろうと思います。

それとA・D・スミスですが、私はひょっとしたら、小嶋さんとスミスの理解のしかたが違いかもかもしれません。私は、スミスはやはり近代主義者だと思っています。つまり、彼はエトニというものを前近代に想定していますが、それは想像上の集団であって、そこに訴求しながらネイションをつくるという彼の立場は、何だかんだ言って近代主義なのです。彼は師匠のゲルナーに反発があったのか、自分は近代主義者ではないと言っていますけれども、かなりの近代主義者だと思います。

いまの三層という話で言うと、第一層が彼の言っているところの水平的貴族的エトニです。ここに訴求しようとするやり方と、垂直的平民的エトニ、これが第三層で、これに訴求しようとする方法があって、前者をやったのがたぶん康有為で、後者をやったのがたぶん孫文だということになるのでしょうか。エトニというのは選択可能なのです。

孫文がやったことは、結局簡単に言ってしまうと垂直的平民的エトニ、つまり第三層の宗族的な血縁の關係に呼び掛けて、ネイションというものを構築していこうとする。それが漢人です。その漢人を創造するにあたって、血縁というのは一番自然な力で、自然な力というのは王道であるという、孟子と進化論を一緒くたにしたようなことも『三民主義』で述べています。

しかし、それをやってしまうと、ほかの民族もみんな同じことを言えるわけです。実際に辛亥革命のあとに、モンゴルやチベットの情勢がだいぶ怪しくなってきます。そうすると今度彼は、結局あの人たちは外来者だと言い始めるのですね。これは『三民主義』の「民族主義」のところに書いてありますけれども、つまりイミグラントだと。もともとわれわれの国に住んでいた人間ではないから、人口的にも少ないと。そして第二層の漢人の文化は、イコール第一層の中華文明であると言いつつ出さずには。だから、事実上全部統一されていて、われわれは同文同種で同じ血統だと言うわけです。そういう乱暴なことを言っています。

私は、これはいまの中国の愛国主義に、だいぶ禍根を残したと思っています。つまり、華というのは「文明」という字が表側に印刷されているコインなのですが、裏側を見ると実は「政治」なのです。漢人は表側に「血統」と書いてあるけれども、裏側を見ると実はやはり「政治」です。漢族も表は「文化」で裏側を見るとやはり「政治」。中華民族は表側に堂々と「政治」と書いてあるけれども、逆に裏側を見ると「血統」と「文化」と「文明」がごちゃごちゃに書いてあります。そのときどきでヌエのようにいろいろな顔を見せて、それがいろいろな弊害を生んでいるのでしょう。

もう一つ、チベットの話で、これは高先生にしろと言われていたのです。ダライ・ラマがやっていることは何かというと、彼はかなり恣意的なエトニに対する訴求をやっています。チベットは実はプーチュンとプーチュンという2種類の概念がありまして、これはいわゆる大チベットと小チベットです。大チベットというのは、アムドやカムまで入れた部分です。それに対して小チベットというのは、だいたい昔のゲルー派の、直接統治が及んでいた地域であると考えていいと思います。

これは河口慧海の師匠だったチャンドラ・ダスの辞書などにも出てくる話なので、たぶんかなり昔からあった区分だろうと思います。ただ、プーチュンはあくまでも文化的な領域です。政治的な

領域ではありません。プーチンのほうがチベットの「領土」として政治的な正当性があるということ、ダライ・ラマはずっと言っています。北京のほうが「西藏」と言った場合には、全然そんなことは考えていません。あくまでも西藏自治区のことなので、話がかみ合わなくなります。

しかも、その範囲に必然性がないのです。言語でもくくれないし、民族でもくくれないし、宗教でもくくれません。無理にくくろうとすると、なぜそこにラダックとかブータンが入らないのか、そういう話になってしまいます。だから、あれはかなり恣意的なくくり方で、説得力はないわけです。

また、チベットに対して何か特殊な対応をするとき、例えばダライ・ラマが欲しいと言っている高度な自治を与えた場合に、実はずいぶんいろいろな問題が出てきます。例えばカムやアムドには先ほどの松岡先生のお話に出てきたような、いろいろなグループがいるわけですが、そこにどうやって線を引いても、新たなマイノリティーが生まれるのです。高度な自治化に取り込まれてしまって、パニック状態に陥るグループが出てくるわけです。彼らに対しては、どういう手当てをしたらいいのかという問題です。

あとは、ダライ・ラマの側も実は一枚岩ではなくて、青年会議派というのがいて、これは独立派なのです。だから、彼は常に下から突き上げをくらっているわけです。そういう状況のなかで高度な自治をもらって、彼は将来にわたって高度な自治で満足して、チベットは独立しませんということはどうやって保証するのか。こういう問題もあります。だから、チベットに対して何か特別な対応をするということが、実は簡単なようで相当難しいのです。

国家形成エトニについては、非国家形成エトニに比べて、高度な政治的要求をする客観的な合法性がはたしてあるのかという問題が第一点。第二点は、現実には中華人民共和国というものが存在するわけですから、やはりそこを前提にしないと現実的な話はできないと思うのです。中華人民共和国の基本政策は民族区域自治で、今日の小嶋さんの話には民族区域自治の話は出てこなかったけれども、それに対するオルタナティブをどうやってとなえるのかという問題になると、これは相当頭を悩ませる問題で、私も悔しいのですけれどもオルタナティブが思いつかないのです。批判は簡単なだけでも、いい考え方が出てこないで、できれば小嶋さんに若い頭で考えて私に知恵をくださいというのがお願いなのです。以上です。

●**座長**— 3人の先生、どうもありがとうございました。時間がないので私のほうではまとめませんので、小嶋さんから答えられる範囲でお答えしてください。

●**小嶋**— まず、コメントをどうもありがとうございました。やはり恐ろしいなと思ったのは、自分が書いているときにわからなかったこととか、これは今回脇に置いておこうというところはすべてご指摘いただきました。もともと穴が多いものですから、これだけの量すべてに答えられるかわかりませんが、お答えします。

まず、梅村先生からいただいたジェディディズムの持続性についてですけれども、私個人の考えとしては、ジェディディズムは現在まで維持されているということが最後に出した結論というか、ナショナリズムには文化的アイデンティティが反映されることの一つの根拠になると思います。

もう少し具体的に考えてみますと、ジェディディズムをもともと維持していたのは、古い宗教的な知識を持っていた人々で、これがアリムと呼ばれていた階層なのですけれども、まずこういう人のなかから革新的な方向へ進んでいく人たちが現れてきました。それから留学生の教育を受けた

り、革新的なアリの教育を受けた新たな階層から、エフェンディーと呼ばれる階層が出てきます。こういう人たちのなかには、その後の有名なサイフジン・エズィズなども含まれています。彼が中華人民共和国成立後に、激的なスーフィズム批判を展開していくわけですが、この背後にあったのも、ジェディッディズムの思想だったのではないかと思います。

その後、トルコから来ていた留学生や教師たち、そして彼らのパトロンとなっていた初期の実業家、ムスリムの資本家たちが一体となって推進していたこの運動に関して、現在様々な著作が出版されています。そういった面でも、この運動に関して、今現在でも相当注目度が高いということがうかがわれるのではないのでしょうか。

そういった面から、今回ナショナリズムの記憶といった、あいまいな表現をしましたが、そういった記憶というかたちで維持されている動きは、現在でも見られるのではないのでしょうか。ただし、それを国民国家と結び付けて、常にマジョリティーの側から他者を理解していくことがむしろ問題なのではないかと思います。ただ、もちろんウイグルとか東トルキスタンのムスリムのなかに、いわゆる「原理主義者」というような急進的な思想がないということではないと思います。

もう一つ、中華民族の創出とジェディッディズムのあいだにあるタイムラグを、どのように解消していくのかも大きな問題です。アンダーソンが言っていた想像の共同体的意味において、ジェディッディズムや中華民族多元一体論が運動としてネイションの形成の道具となっているために、この時点からこの時点までという、歴史的時期を抽出してというような非常に明確な時間設定は、自分のなかで難しかったということが一つの理由だったと反省しています。双方の出現時期に関しては、実際はかなりタイムラグが存在しているわけですし、ジェディッディズム自体も19世紀末のジェディッディズムと、現在のリヴァイヴァルムーブメントのなかでのジェディッディズムがはたして一緒かという問題は、非常に大きな問題だと思います。

生活としてのイスラームと、運動体としてのイスラームととらえる考え方の違い、それからウェテンという概念ではなくて、生活に密着したイスラームのなかでは「イル」といった土地概念があったということですが、それはまさに私のなかで大きな疑問としてあったことです。つまりこのナショナリストと呼ばれる人たちや、あるいはナショナリズムという思想が、はたして知識人だけのものなのかということが、また一つ大きな疑問としてあります。

生活のイスラーム、つまり大衆のイスラームということを考えると、東トルキスタンのムスリムのなかには、いまでもスーフィー信仰の名残が残っています。例えば、マザール信仰などに表れるように聖者のお墓を信仰したり、そこで呪術的なことがおこなわれるわけです。子授けとか、イボ取りとか、そういったものです。そういったものがおこなわれているということは、実際に見てみれば、ジェディッディズムがあれだけ批判しているものが、いまの民衆のあいだにはそうやって残っているのです。ということは、ジェディッディズムは都市だけ、あるいは知識人だけの活動であったと言えるかもしれません。

一方、例えば回族社会のなかで、いわゆるスーフィズムというかたちで教団組織がしっかりと残っているのに比べて、ウイグル社会ではそういったものが完全な乖離を起こしてしまっているのではないかと。マザール信仰は、かつてのウンマがそうであったように、一つの運動体としての場を与えているとは考えられないのです。生活的な大衆的なイスラームと知識人のイスラームの乖離が、一つ大きな問題なのかなと考えました。ただ、今回は全く触れられませんでした。

王柯先生にもいただきましたし、梅村先生からも教えていただいた、歴史的な経緯について全く触れていないことについて、特に中華民族がいかにして登場してきたかということ、しっかりと

おさえておかないといけないというのは、まったくその通りだと思います。ただ、多元性というのが所与であったかのように解釈することが問題になっていたと思うのですけれども、スミスの分析手法に倣って、エスニックな要素が継承される際のシンボルから見ていこうという考え方だったのですが、シンボル自体が形成される背景検証の姿勢が、やはり必要だったと思います。

日本のことをやらなければならないという指摘はほんとうにそうだと思います。ただ、日本の民族問題と、中華人民共和国における民族問題というものが、どちらが優劣ということではないですけれども、なぜ対外的にクローズアップされないのですか。あるいは葬り去られていくかということを見ると、ネイションをめぐる問題においても、その共同体が持っている規模の問題があるのかなという気がします。というのも、東トルキスタン共和国も実際にネイションを形成したということが、その民族問題の大きさに大きくかかわっているのではないかと考えると、自らがネイションを形成したプロセスや記憶というものが、常にそれを提起する原動力になっているために、そういった原動力に欠ける規模の小さな共同体ではまた違った民族問題もわれわれは見いだせるのではないかと思います。

比較という手法、それが例えばスミスの方法論によっているという問題点ですけれども、私がスミスの理論に大きく基づいたというのは、例えば中華というものの自体を、虚像として批判することが、粹組みとしてはどうかとらえたのです。むしろ虚像を実体化しよう、領域化しようという背景に応じて必要とされた知識体系や象徴について、今回は特に注目してみようということでジェディディズムあるいは多元一体論を取り上げたのです。

それから田島先生からのコメントで、国家形成に向かうエトニとそうでないものと、何らかの基準をもって分けて、それに対して特殊な個別の対応をしなければいけないのではないかと。あるいは、そうしなければいけない理由は何だ。そういったことは事実上不可能で、民族区域自治以上のものを提起できるのかということについては。

●田島— 不可能だとは言っていないよ。教えてください。

●小嶋— ただ、民族区域自治や多元一体論の存在自体を批判する、あるいは民族区域自治に問題があるからというかたちで出発点に立つ場合、そもそも何を契機としてジェディディズムのような見方や、あるいはそれに基づく感情が生まれてくるのかという点が見えにくくなるかも知れません。例えば、今回何度か話題になっています漢化と言われるような変化は、いったい何の変化だったのか。

例えば少数民族の地域に入っていくと、彼らは流行の服を着ている人もいます。これもある文脈では漢化ととられるかもしれません。あるいは、自律的な発展ととらえられるかもしれません。つまり、漢民族と似たような服を着ている。その背景は何だったのかということ、国民のあいだで統一的な市場ができたことによって、北京ではやっているものが地域に入ってきました。そういった市場だけに限らず、均質な国民化へ向かうという文脈が、漢化ととらえられている場合があるのではないのでしょうか。

その均質さを拒もうという感情、あるいは均質であれば漢化しているのか、あるいは華化しているのかということ、それを自らがどう規定するか。つまり、そのような変化を彼らがどう語っているか、漢化という言葉、そのとらえ方を拒んでいるのではないかとということが理解できれば、少数民族としての彼らの語りに違いがある分、政策上のシステムとして例えばウイグル人とその他の人たちのあいだに何らかの対応の差異を設ける必要もあるのではないかと思います。

ちょっとまとまりませんでした。長々とすみませんでした。



●**座長**— 本来は先生方やフロアからご意見をいただきたいところですが、最初に約束した時間を過ぎてしまって、そもそも 16 時 40 分に終わるところを 30 分も過ぎております。次の総合セッションでいまの議論を続けて、ぜひご発言をしていただきたいと思います。

●**加々美**— 彼のジェディディズムが、議論のなかで必ずしも理解されていないと思います。それだけひと言、ちょっと補足できればと思いますが……。

●**座長**— という補足の要請がありましたけれども、次の総合セッションで議論ができれば、していただきたいと思います。

ご意見をいただけなくて、たいへん申しわけありませんでしたけれども、これで一応終了させていただきます。